

郷愁台湾

高部英明

1. はじめに

国立台湾大学(旧台北帝國大学、阪大より2年歴史が古い)のPauchy Hwang(以下Pauchy)教授とStanford大学のPisin Chen(以下Pisin)教授の主催で開催された「The 2nd International Workshop on Laboratory Astrophysics with Intense Photon and Particle Beams」の会議に招待され出席した。私には両教授とは不思議な巡り合わせである。物理学会理事に就任し、14ヶ国が加盟するアジア太平洋物理学会連合(会員約8万人:略称AAPPS;詳しくはHP

<http://www.aapps.org/>

参照)の担当を仰せつかった。その連合の機関誌を隔月に発行している責任者がPauchyである。偶然にも彼の専門が宇宙物理。彼は台湾のCosPAプロジェクトのリーダーである。このプロジェクトの研究内容は宇宙の背景輻射や宇宙線物理、年間予算は約3億円。昨年3月、AAPPSの会議で台北に招待され意気投合した。Pisinとは米国の第3回LabAstro会議(2000年、3月、ヒューストン)で知り合い、帰りに訪問して議論をした【写真1】。

Pauchyは大変男気のあるやつで、不足分をCosPAの金も投入して、立派な機関誌を発行している。日本は物理、応物の両学会が資金援助している。彼は「この機関誌をアジア・太平洋のPhysics Todayにする」と日頃、その熱い胸の内を語る。物理、応物を代表して私は「その気持ちは尊いとして、今はまだその時期ではない。Web-siteを活用してAAPPSを活性化することが先決だ」と、今回、会議の後で「ひざ詰め談判」する目的もあり参加した。面と向かって話をしないと、彼は、彼の信念で動いており、電話ではけんか別れが心配される。ところが、Pauchyは会議寸前に脳梗塞(長嶋監督と同じ、左の脳)で倒れた。が、Pisinが「Pauchyの性格から、『俺のことで会議を延期するな、やれ』というはず」と開催。Pauchyには7人の秘書がおり、彼女たちの懸命の努力もあり、有意義な会議となった。私はPauchyの見舞いも兼ねての参加となった【写真2:会議場となった物理学部ビル】。

2. 実験室宇宙物理会議

会議は加速器ビームや超高強度レーザー、および、その組み合わせによる宇宙物理の研究が主題。加えて、宇宙線の起源と観測のための「宇宙線シャワー」の加速器による模擬計測など。3月の米国での実験室宇宙物理(以下LabAstro)が流体や輻射などが主体のHED LabAstro(HED=高エネルギー密度)であるのに対し、こちらは高エネルギー宇宙線などのHEP LabAstroで(HEP=高エネルギー物理)である。二つの会議は相補的で大変おもしろかった。もし、レーザー研での実験室宇宙物理が順調に進むようであれば、次次会の4年後の両会議を共催、大阪で開催してみたいものだと、考えている。同時に、昨年、特定領域が認められたTelescope Arrayの特定代表、福島教授(東大・宇宙線研)と親しくなり、私たち

が計画している模擬実験に大変興味を持って頂いた。また、なかなか大阪でゆっくり話す機会のない田島・原研関西研所長とも意見交換の時間をもてた。Pisin と田島さんが話しているところに割り込み、「こんな時でもないでゆっくり話ができないんだ」と Pisin に断り、レセプションの場で話をした。田島さんには「田島さん。レーザー研の全共化ではセンター長をえらく、いじめているようですね」という言葉からはじめて1時間ほど話をさせて頂いた。

参加者20人ほどのこじんまりした会議【写真3】で、口頭発表以外に2つの班に分かれて互いの研究の理解や、今後の課題を話し合う討論会を持ち（合計4時間）、講演の内容を補ってさらに理解を深めることができた。会議の発表部分は各自の ppt-files を秘書が集め、会議のホームページ（下記）のプログラムのところからダウンロードできるようになっている。また、会議の様子や excursion, banquet の様子など Photos のページにたくさん掲載されている。

<http://www.cospa.ntu.edu.tw/labastro/index.htm>

英国 RAL(Rutherford-Appleton Lab.)の Bob Bingham の話は大変おもしろい。重力崩壊型超新星爆発の際のニュートリノ加熱は爆発に欠かせない。しかし、世界中の第一流の研究者がシミュレーションしているが、未だに爆発するという信頼の置ける結果は出ていない。かれは、ニュートリノの弱い相互作用は Weinberg-Salam の電弱理論からクーロン相互作用と類似の性質があり、集団現象によるニュートリノの自己収束やランダウ減衰などの定式化をしている。これを例えば山田君（早稲田）のコードに入れると爆発する可能性がある。大変野心的でおもしろい。近いうちに共同研究の予定。

Bingham が言っていた。VULCAN Laser で皆さんご存じの RAL では、シンクロトロン加速器、核破砕加速器、ミューオン科学、電波望遠を中心にした宇宙物理など多岐にわたる研究をしている。2週間前に RAL の中に”Center for Fundamental Science”が設立された。各研究領域から人を集め8人の研究者とPDでスタートした。Bingham もその一員。これから、加速器とレーザーを組み合わせた実験や実験室宇宙物理など学際的な研究の検討、提案、予算獲得、実験要請などの活動をしていくとのこと。「同じような各研究所センターや研究科を含めて学際的交流をコーディネートするセンターが阪大に必要だ」とひしひしと感じた。

台北から60kmほど南に「台湾のシリコンバレー」と呼ばれる新竹市がある。ここで、10TW レーザー装置でレーザー加速などの研究をしているグループがいる。PD加えて4人で、その実験成果の質の高さと話題の広さに圧倒された（上記 web-site の S. Y. Chen の発表）。やはり中国人は優秀です。

3 . 台湾物理学会会長

会議は5/7-9と開催された。私はAAPPSの関係で10日(月)にPauchyと直談判する予定で航空チケットを買っていた。しかし、彼は病院。そこでLarisa(AAPPS編集担当秘書)に頼んで、編集委員でもある物理学部長のChing-Ray Chang教授に月曜の午前中話し合いの時間を取って頂いた。たまたま、彼は台湾物理学会(会員約2千人)の会長でもあった。まず、Pauchyが倒れたことで、今後の発行予定を聞いた。2回分の記事はあり、発行は可能。しかし、その後をどうするか。私は、日本側の意向を伝えた。つまり、当分は機関誌に原著解説論文を載せた格調高い現在のあり方を改め、17の加盟学会の英語版

発行誌の交流の場として Web-site に重点を置き、Virtual Journal とする。そのために、台湾が Web-site のケアを私の指示などに従って行く。この議論には、Larisa も同席し、了解。ただし、世界中の主だった研究所などの図書に置いてもらうために、1千部ほどは印刷物として配布する予定だ。

編集の話が一段落して、台湾物理学会会長としての話が始まった。まず、日本物理学会との協力協定の締結を行いたいこと。これについて私は個人として賛成で、15日の理事会で審議すると約束(15日、東京の本部での物理学会理事会で承認された。同時に、先月、香港物理学会会長から提案のあった協力協定締結も承認された。これから実務に入る)。次に、彼はNSC(National Science Council)の理事長も兼任しているとのことで、「NSCにスポンサーになってもらい、Pan-Pacific Physical Society Summit(環太平洋物理学会サミット)を開催したい。11月か12月始めに台北で開催。米国始め日本、中国、すべての各国物理学会会長を招待したい。どうだろう」と聞かれたので、「それはすばらしい。私は大賛成だ。その際、サテライト会議としてAAPPS加盟17学会の会長を集め、AAPPS活動活性化について話し合ってはどうか」と提案した。喜んで了承して頂いた。(注：これは05年1月末に台湾の高雄で開催された。Aki Photo Diary 参照)

日本にAAPPSの本部を設置する件も了解して頂いた。これで正式に日本の物理、応物、中国、台湾、韓国の各国物理学会が賛成してくれた。5月末の韓国でのAAPPS理事会での提案はすんなり了承されるであろう。一安心である。本部の件を話し合っている時、会長が「Larisa、それじゃおまえ日本に行くか」と言いだした。Larisaは大変驚いた顔をして(目が点になって)、YesともNoとも答えなかった。

4. 台湾現代事情

昨年3月、阪大核物センター長の土岐さん(AAPPS現理事)と台北にAAPPSの事務会議に出席したのが初めての台湾訪問。頭に知識はあっても、見て、話して、歩いてみて初めてその国の様子が少しわかったような気になるものだ。その際、AAPPS会長のW. Namkung(韓国Pohang工科大学教授、建設費5千億円と言われるLinear Collider計画のアジア中近東地区代表)にも会った。

台北の空港にはVOLVO車が迎えに来てくれる。昨年と同じ運転手。高速を使い、1時間で台北市南にある国立台湾大学に着く。今回はLeader Hotelという立派なホテル。会議は明日から。そこで、大学近辺を散策する。大通りはしゃれた店が沢山並ぶ。しかし、一步、裏通りに進むと、日本の昔懐かしい町並み、という感じの店が軒を連ねる。私はそんな「人のにおい」のする通りを歩くのが好きだ。日本が戦後の高度成長期に捨て去った物がここには残っている感じがする。物の値段が安いのも魅力的だ。現在、台湾の1元(1ドルとも言う)は3.6円程度。これで換算していくと、物価は半分から1/3程度。私は夏服のカッターを4着も買ってしまった。

地下鉄も大変きれいでわかりやすく、かつ安く、大学から6駅で台北駅(料金は20元)。パリの地下鉄のような臭いもなく、表示も漢字だからすぐにわかる。中国の様な日本人にわかりにくい簡略漢字ではなく、戦前の旧漢字でレトロな雰囲気すらある。台北駅の南西に夜店の名所がある。その周りには沢山の本屋さんも。夜店は安く、味も良い【写真11】。ビールを近くのSeven Elevenで買って来て、屋台の

テーブルで食べる。近くのきれいな店で大きな月餅も買った。本屋の間にビデオ専門店もある。「69元」というCDショップで、懐かしい洋画の名品のDVDが3本100円で売っていた。試しに買って見たら、音は英語で字幕も英語があるので、見ていてわかる。結局、2回来て合計10本買って帰った。エリザベス・テラーの「クレオパトラ」やソフィア・ローレンの「エル・シッド」などなど。昨日気づいたが、チャールトン・ヘストン主演の「北京の55日」(1964年作)は、なんと、日本語の字幕が入った映画であった。どうも、著作権が切れた物を日本から取り寄せて、字幕入りのまゝDVDにしたようだ。

近くのCDショップでは台湾、西洋、日本の売れ行きベスト・テン・アルバムの表示がある。日本は宇多田ヒカルのFirst Collectionが一番、次が、ラルカン・シエルと続く。First Collectionも288元。安い。大学生の息子が「冬のソナタ」のファンなので、「冬季戀歌」と書かれたヨンさまの表紙のアルバムを買った。CDとVCD(VideoCD)の2枚セット。台北駅には地下街もあり、しゃれた店が並んでいた。

昨年、「台湾のマッサージはとても良い」と聞いて、土岐さん二人で、ホテルが紹介するマッサージに行った。1時間マッサージをしてもらい、足の色が変わるほど、血色が良くなった。そこで、今回はKEKの中島さんと会議終了後、同じ店に行った。全身と足、30分ずつ、合計1時間で1400元。お金を払って、「はい、先生の後に付いていってください」と言われ、白衣の先生なる人物とエレベータで3階に上がる。足を洗って、うつ伏せに横たわる。先生は女性だが、大柄で、すごい力持ち(いや、指力持ち)。ぐいぐいと押してくる。痛いほどだが、痛さが通常の痛さと違い、無理のない痛さ?。今度は仰向けになって足の裏のマッサージ。足の裏には五臓六腑が皆、つながっている。従って、肝臓のところを「ぎゅー」とやられると、「いたたたた。。。」と。「肝臓悪いですね。お酒飲み過ぎね」。ここは、と、押されたところも痛い。「目が悪いですね」(「実は頭も悪かったりして」と中島さんに軽口をたたく)。次は、と、次々に悪いところを指摘される。中島さんに「どうも、体中、ポロポロみたい」とつぶやく。

おもむろに、院長なる老婦人が漢方薬を持って現れる。こらは、貴方の体をよみがえらせてくれる。1割引で進呈します、と。参考までに値段を聞いたら7千元。遠慮します、という、別の漢方薬を持ってきて、「これを10日も飲めば、貴方の不眠症は嘘のように治ります。睡眠薬は頭を悪くしますから、漢方をお薦めします」と。こちらも値段を聞いて辞退することにした。「日本の皆さん沢山買って行かれますよ」と。壁には日本人から此の店への感謝のはがきが至る所に張っている。

日本人はどの程度くるのかと聞くと、「お客さんの八割は日本人」だそう。下手に日本語で「指圧師は、女性の方も皆さん相撲取り並」など、いえたものではない。来店した日本人を中心とする有名人の写真が飾ってある。「小堺一機」「梅宮辰夫」「貴乃花」などなど。このあと、2人で台北駅近くに出かけ、夜店街で上記のように夕食を取った。

台北の気温は、例えば、月曜日が最低26度、最高35度と日本の夏並みで、青空が広がっていた。しかし、湿度があまり高くないのと、建物はすべてエアコンが廊下まで効いているので居心地はよい。実際、火曜帰国し、水曜日に大学に来て、部屋が暑いには参った。セブ(4月から私のところに来た仏人の研究生)が「部屋が暑いから」と4階のロビーで勉強していた。会議2日目午後のExcursionで「孔子

廟」を見学している際、夕立が1時間ほど降っただけで、天気には恵まれた。

5 . 台湾の友達

Pauchy と彼の秘書達のことを書こう。Pauchy は米国で博士号を取り、研究者となり、その後、国立台湾大学(NTU)に教授として戻った。NTU の物理学科のパンフを見ると全教官が米国または欧州の大学で学位を取得している。だから、台湾の研究者の英語は大変流ちょうである。Pisin は NTU の学部卒業と同時に U. C. Berkeley の大学院に進学。博士課程は「現代の量子力学」(和訳は「吉岡書店」より刊行)の教科書で有名な J. J. Sakurai の研究室。ところが、学位を取る前に J. J. Sakurai は急逝した。慌てた彼は UCLA の Jhon Dawson に相談した。すると Dawson 先生は「J.J. の学生なら優秀であることは証明されているようなもんだ。明日から私が面倒見よう」となった。これが、彼とプラズマの出会いだ。

Pisin は現在、Stanford 大学教授で SLAC (線形加速器。この加速器でクォークを見つけた Freedman 達は 90 年にノーベル賞を受賞)を用いた実験グループのリーダーでもある。台湾は中国と同じで大学とは別に学術院(Academia Sinica)があり、そこが多数の研究所を運営している。大学との連携もうまくいっているようだ。また、NSC (National Science Council)があり、学位を持つ研究者達が科学政策を政府に答申し、予算を獲得して色々なプロジェクトを動かしている。Pauchy の CosPA プロジェクトがその一例だ。Academia Sinica の天文学研究所の所長は米国で長年活躍してきた Frank Shu である。彼の教科書を私は 3 冊持っているがその博識には驚かされる。彼は米国天文学会の会長も務めたことがある。

Pauchy のオフィスは物理の 8 階部分である。この 7 階には Academia Sinica の天文研究所のオフィスもある。所轄を越えて人的交流が常時できるようになっている。会議は 2 階のホールで行われたが、8 階にはそれを支えた秘書達の部屋がある【写真 4】。私は AAPPS の関係で機関誌の編集担当秘書とよくメールでやりとりしている。彼女の名は Larisa。台湾の人は皆、本名とは別に愛称を持っている。彼女の性は「黄(Huang)」だが、互いには愛称で呼び合う。Pauchy も同様。彼女は私を Takabe-san と呼ぶ。今回わかったことだが、中国語には日本語の「さん」に相当する単語がないようで、日本語テレビの字幕では「山田さん」を「山田先生」と書いている。「先生」=「さん」のようだ。

Larisa は台南出身で独身、ベジタリアン(年末に結婚した。05年1月に高雄であった時、結婚祝いをプレゼントした。結婚後も働いている)。英語はだいぶ上手。メールでは時々、日本語の単語入りの英文がくる。PCには日本語ソフトがわりと標準で入っているようだ。Pauchy の部屋の隣にはもう一人の秘書、Genie がいる。今回知ったが4ヶ月の子供の母親。私の女房が専業主婦だと言ったら「うらやましー」と言っていた。昨年はこの2人に色々世話になった。今回の会議を仕切ったのは Maggie という秘書。会議前から英文がぎこちないとは感じていたが、新米で、話すのも今ひとつ。Larisa 達先輩に助けてもらいながらがんばっていた。

この4月から秘書になったという Irene。おじいさんが日本人とかで、名は「恵子」と書く。発音は忘れた。自分で「私の名は Keiko。台湾では珍しいの」と。大学は情報・コミュニケーションの学部を出たそうで、「これから、AAPPS の編集を手伝います、よろしく」と私に挨拶してきた。実は AAPPS の Web-site の2ヶ月ごとの更新をこれから台湾でしてもらおうと考えていたので助かった。「もちろん、ホームペ

ージのデザインなどできます」と。ありがたい。

そのほか3人の内、一人は年配の方で子供が大学生。実は月曜日(5/10)、私はこの秘書達に連れられて昼食に行き、色々と話をしたのでこんなことを書いている。会長との話も終え、客員用のデスクで書きかけの原稿の続きを書いていたら Larisa が「Takabe-san 昼食はどうしますか。私たちと行きますか」と聞くので、一緒に行った。秘書5人に囲まれて「何を食べたいですか?」と聞かれたので、せっかくだから中華料理を食べることにした。大学の正門近くの四川省料理の店に。メニューを見てもよくわからない、「何が良いですか」と Larisa が聞くので「ラーメンが食べたい」と言ったら「Are you kidding me!」と、まじめな顔で怒られた。「いやいや、麺類が好きなんだ」とあわてて取り繕った。注文は任せて色々話した。英語は Larisa が一番良くできる(というか、私の英語に慣れている)。私が聞いたり答えたりして、少し難しい英語を喋ると Larisa が中国語に訳して皆に伝える。ジョークの場合が多く、中国語を聞いて皆大笑い。皆に問われるままに、若い頃の話や女房のこと、子供のことなど話した。皆が私の女房に会いたいというので「じゃ、次にくる時は女房を連れてくるよ」と約束した。

6. 新世紀五四運動

「五四運動」をご存じだろうか。世界史を勉強した人は「あー、そういえば中国が日本の支配をいやがって何かあったな」と思い出すだろう。1919年、中国、北京の大学生が日本のあからさまな内政干渉に対し「排日運動」を行ったのがこの年の5月4日で、その運動は上海など中国全土の都市に広がった。

Pauchy が皆と未来を語り合うための憩いの場として、ステージ付きの喫茶・パブをこの5月4日に開店した。店の名前は「Café 113 圓夢」である。意味は「113の夢がかないますように」とのこと。夢を語り、未来を築こう。そのための社交の場として市内に店をオープンさせた。人生とは皮肉なもので、開店を目の前にして Pauchy は病に倒れた。今回、私は Pauchy を月曜の朝、見舞いに行く予定になっていた。しかし、会議の初日に「2日目のバンケットの後、Pauchy が病院の許可をもらって彼のカフェで皆を待っている」との案内があった。

バンケット会場から歩いて10分くらいのところにカフェはあった。店にはいると Pauchy 婦人が皆を歓迎してくれた。その横に車いすに乗り、頭を丸坊主にした Pauchy がいる。左の頭に手術の痕が赤く残る。「Pauchy. I am Aki. Can you see me?」と問いかける【写真10】。まだしゃべれない。動くのは左手と頭。頭を何度も振りながら「良く来てくれた」と言っているようであった。左手で掴むように握手をしてくる。皆が入ったところで、奥さんが挨拶し、他の客に我々を紹介してくれた。そして、本日の演目に入った。中国の民謡との紹介だが、男性歌手の歌唱力は西洋オペラそのもの。中国語がこんなに美しいとは。その後、女性歌手の西洋オペラ歌謡があり、2時間ほど Pauchy を囲んだ。歌の間、奥さんは Pauchy の横に座り、動かなくなった右手を一生懸命動かしてリハビリをしている。

「新世紀五四運動」。カフェの案内のパンフレットがあった。まだ中国語版しかないが、表紙にこの言葉を書いていたので興味と恐れる気持ちを持ちながら漢字を追ってみた。開いてすぐに、物理学科の15階建てビルを背にした Pauchy の写真がある。そこに、彼の人生観のようなことが書かれているようだ。最後の方に「路遙知馬力、日久見人心」(「道遠くして、馬の力を知り、時長くして、人の心を知

る」という意味。中国との交流が始まった頃、山中千代衛先生が上海のデン・シン・ミン教授（故人）から聞いたと披露してくれた。中国人は良いことを言うと、しきりに引用していた」という有名な格言を見つけた。その後、「私たちは台湾人ではなく、アジア人でもなく、地球にすむ人である」。排外的な運動の始まりが五四運動であったなら、新世紀の五四運動は世界中の皆が地球人として同化することにある。のような「うんちく」をたれているように思えた。読んでみて安心したが、5頁以降37頁まで、中国のWeb-siteから取ってきた「五四運動の歴史資料」を載せていた。

Pauchyとは二年前の10月に大阪であって以来、4度合い、電話でも何度も直接話してきて、気心の知れた盟友と勝手に思ってきたが、やはり、我々の間にはもっと強い力で乗り越えていかなければならない忌々しい過去の歴史がとぐろを巻いているように思われた。「いや、これで当たり前ではないか。Pauchyのように自己の民族に誇りを持つ男だから、つきあうに値する人間ではないか。これでいいんだ」と、自分に言い聞かせた。

7. 台湾のテレビ

泊まったホテルが高級だからかもしれないが、テレビのチャンネルの多さには驚いた。100チャンネルほどあり、70番組はやっている。まず、英語番組ではCNN、洋画が5チャンネルほど、日本の番組はNHKのBSはそのまま見る事ができる。これ以外に、フジ系の番組（ここではキムタクの「HERO」を見た）、「緯来日本」という日本語のチャンネル。これ以外にも一本。音は日本語で中国語の字幕が出る。中国語の番組を回していると、夜の番組では「今日の日本風俗、東京歌舞伎町」などを紹介している。恥ずかしいやら。洋画は一日中やっている。もちろん英語で、字幕が中国語。滞在中に「グラディエーター」、「モンテクリスト伯」、「エイリアン4」を見た。英語が聞き取れない時は漢文の字幕を見る。何となく意味がわかる時がある。不思議な経験だ。一日中、人形劇、それも三国志時代のような背景の物語をやっているチャンネルがあった。かなり有名なようで、台北駅の近くでそのキャラクター・グッズなどを見つけた。日本のアニメは世界に誇る先進文化。ドラゴンボールやドラえもんなどなど、中国語の番組で放送されている。

ある意味で、日本は常に台湾など東南アジア諸国から、良い面も恥ずかしい面も注目されていることを、気にとめておく必要があるだろう。「見られている」という意識は、とかく自堕落に成りがちな人間のモラル意識を支えてくれる。良い意味で、日本は「見られている」ことを意識しようではないか。

8. 台湾の宗教について

LarisaやGenieやらと、名前が洋風なのでキリスト教の影響やも、と考えていた。しかし、Larisaは仏教徒だそう。名前と宗教は関係ない。RobertをBobと愛称で呼ぶと親しみがわくように、皆、愛称を付けているようだ。私も英語で喋る時は、少し親しくなった人には「Call me Aki in short. I ask my friends to call me Aki, when I speak in English」と言うようにしている。何故、Akiになったかということ、アリゾナ大学の助手で赴任した20年前、着いて最初に面倒を見てくれた院生のPat (Patrick) MacKenty（現在、U. Rochester, LLE, 理論・シミュレーションのリーダー）に、「御前のことをなんて呼べばいいんだ」と聞かれて、とっさに思いついたのが「Aki」だった。「Hide」だと、ヤクザみたいだし、英語発音では「ハ

イド」となり、「ジキル氏とハイド博士」を連想させそうだと考えてのことである。この名前のおかげで、ずいぶん得をした。Pat にはこの点でも未だに感謝している。

初めて外国に出たのは、80年の9月。マックスプランク研究所に客員研究員として赴任した時だ。ミュンヘンに着いてすぐ、パリでの ECLIM 会議に参加した。そのあと、ワークショップがあり、イスラエルの Don Shvart (いまだに変わらず、毒舌だが) がきつい質問を、あの怖い Robert L. MaCrory する時に、「Hi, Bob. You mentioned that But, I think ...」と会話しているのを聞いて、「厳しい質問する時も、最初に愛称で呼ぶと、けんかにならないな。アメリカ人はうまい方法を考えたもんだ」と感心したことを鮮明に記憶している。従って、私も、愛称で呼んでは、きついことを言ってきた経験がある。何人かとは本当のけんかをした。が、喧嘩のおかげで今では良い友達関係を築いたりしている。

話がそれた。宗教の話。台湾ではやはり仏教が一番多いそうだと(次が道教、キリスト教)。しかし、有名な仏教寺院は聞かない。有名な寒山寺などは、上海を家族で訪ねた昨年、近郊の蘇州で見学した。台北の観光名所はむしろ、道教の寺や孔子廟(英語では廟は temple と言っている)だ。今回のエクスカーションでは、孔子廟を見学した後、その裏にあった道教の寺を見学した。銀行に勤めるというボランティアの女性が流暢な英語で詳しく説明してくれた。Pisin も一緒なので、何でも聞いた。まず、孔子イズム(Confucianism)は宗教ではないこと。孔子をたたえる建物流。孔子は学問の神様で、孔子廟には高校や大学の受験票(写真入り)のコピーを「合格祈願」に飾っているのを見かける。Pisin も台湾大学を卒業し、パークレーの大学院に入学する時、お母さんに連れられて、この孔子廟に来たそうである。【写真8】そして、お母さんが息子の勉学の更なる向上を祈願していたのを良く覚えていると。Fさんが「孔子は菅原道真ですね。ここは天満宮」というので、「でも、道真は神道という宗教の神になった。孔子は宗教の神ではない。そこが違う」と、私。

道教(Taoism)はむしろ日本の神道に近いところがある。【写真9】一神教ではない。偉大な人物が神になる。例えば三国志の劉備の将軍、関羽などが良い例。一昨年、北京を訪問した際、Institute of Physics の Jie Zhang が最初に連れて行ってくれた店が四川省料理の店で、入り口すぐに、関羽の神棚があったのを覚えている。見学した道教の寺の神は宋の時代の有名な医者であるとのこと。従って、ここは病などに良く効くお寺といえる。道教では死んだ人は皆、神になると教える。しかし、あの世も金次第、というところがおもしろい。お葬式には金色と銀色の作り物のお金の束を用意して燃やす。金色のお金は神様への賄賂(?)、銀色のお金は、本人があつて困らないためのお金。道教では寺には僧侶は居ず、僧侶も在家で、お葬式の時だけお寺に来てお坊さんになる。道教では皆死んだら神になる、と教えるため、台湾が日本の植民地になった際、日本軍が「神は天皇だけである。不謹慎な宗教なり」と、お寺の一部を壊し、孔子を祭るようにした。それが今もこっている。偶然にもガイドがそんな話をした後、道教の寺の一部の孔子廟の柱を見ていたら、その中の一本に「大正七年。。」と書いた金文字を私が見つけた。ガイドに「ほらここに」と説明すると彼女も驚いて、まだ残っていたのね、と皆に説明していた。

9. 最後に

昨年、初めて台湾を訪ね、台湾に興味を持った。Pauchy との関係が台湾に興味を持たせたと言っていい。そこで、台湾に関する本を3冊ほど読んだ。最初が李登輝著「武士道解題(ノーブル・オブリージュと

は) (小学館、2003年)。次が、蔡コンサン著「台湾人と日本精神 (日本人よ胸を張りなさい)」 (小学館、2001年)。もう一冊は、もちろん司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズ40の「台湾紀行」 (朝日文庫、1997年)。

「武士道」は5千円札の新渡戸稲造が、米国人の妻や友人から「宗教を日常生活に持たない日本人の倫理観など、いかにして形成されているのか」を問われて、日本人の精神構造への「武士道」が人間形成の背景にあることを理解してもらうために書いた物である。蒋介石の後、息子の蒋経国が国民党の総統を継ぎ、彼の死によって、副総統であった李登輝が内省人 (国民党が台湾に来る前から台湾に住んでいた人たちを示す) として初めて88年1月、総統に就任し、台湾の民主化は徐々に進展した。彼は、大学まで日本の教育を受け、「武士道」は彼にとっての行動規範となっていた。大学は京都帝国大学で農学を学んだ。(参考: 新渡戸著の訳本「武士道」 (三笠書房) はトム・クルーズの「The last samurai」で、見直されているようで、最近のベストセラーにもなっている)

蔡さんの本は、まさに、「目から鱗」である。日清戦争の結果、下関条約で台湾の割譲に当時の清朝首相、李鴻章はサインをした。「台湾など野蛮の地」という認識がサインさせたのではないか。(李鴻章の精神構造などは最近読んだ、浅田次郎著「蒼穹の昴」 (そうきゅうのすばる、講談社文庫、全4巻) に詳しい)。明治維新から富国強兵で、国民には余裕に乏しい働き蜂を命じながら、そんな貧しい日本帝国が植民地を得た。貧乏人も外に出ると格好を付けたがるように、日本帝国が送り込んだ台湾総督は「いい格好」を台湾の人に見せることを始めた。おかげで、台湾の治水や下水など社会インフラは当時の日本以上に先進的になった。その背後には、台湾の地で篤実に使命を果たしていった日本人の技術者などが沢山いた。彼らは現地に溶け込み、皆から慕われながらその生涯を終えた。死後、皆が寄付でお金を出し合っ、銅像を造り、感謝の気持ちを絶やさなかった、などの美談がある。

ところが、国民党が大陸での共産党との戦いに敗れ、台湾に退去して逃げてきた。戦後の穏やかな台湾の地に、今度は国民党という非文化人達が、日本の統治で文化度の高くなっていた台湾の地に土足であがってきた。そして、戒厳令を敷き、民衆の弾圧を始めた。そんな中で、先の日本人達の銅像などは破壊されてしまった。長い暗い日々も、李登輝の総統就任 (88年)。その後の総統の選挙による選出という民主化の推進で、経済的にも急速に発展していった。今では、破壊された日本人の銅像を建て直そうという動きがあるそうである。同じ植民地でも台湾の場合と、歴史と文化も日本より上だと考えていた朝鮮の場合とではとても異なる。当然のことといえよう。

李登輝の本や蔡さんの本を読んでいて、日本人が忘れてしまった「大和魂」や「武士の魂」が、台湾にこそ残されていることに気づいた。そんな台湾から私は日本の良き武士道を学んできたような気がする。日々大学では独法化後のあり方で、「競争的資金の獲得」、「いかにして大型装置の維持運営の資金を獲得するか」、「そのためにどんな屁理屈をこね回すか」などの会話を聞いていると、武士道など全く眼中になく餓鬼道に落ちてしまった大学の先生達の顔しか見えてこない。本来「自分はこの研究をどうしても推進したい。そのためには資金を獲得して」という「どうしてもやりたい」という目的が先に来るべきである。ところが、何ともお寒い、形而下的な話しか聞かえてこない中で、日本人が忘れ去った心の平安と生きることへの美意識のようなものを、台湾を訪ねたことで、直接、間接に、再発見した思いである。

「郷愁台湾」写真集



写真1 <左> : 左より Pisin, 筆者、Pauchy, Pauchy 婦人。昨年7月、オックスフォードであった「Laser-Beam Interaction」国際会議のバンケット (Blenheim Palace) の時。
写真2 <右> : 国立台湾大学物理系建物。13階部分にはホールとテラスがある。



写真3 <左> : 会議の風景
写真4 <右> : 秘書達。左から Maggie, Larisa, ??, 恵子, Genie, ??(年配の方)



写真5 <左> : 集合写真
写真6 <右> : 大学内の大通り



写真7 <左> : 台北帝国大学時代から残る正門

写真8 <右> : 孔子廟。Pisin は米国に発つ前、お母さんにここに連れてこられ、二人で学業向上の祈願をした。左端が Bob Bingham。Pisin の後ろの若者は京大基研で一般相対論で学位を取り、現在、新竹の精華大学でPDをしている瀬戸君。



写真9 <左> : 道教のお寺

写真10 <右> : Pauchy が経営する「113 Dreams Café 圓夢にて。車いすの Pauchy に皆からの大きいメッセージを Pisin が渡している。



写真11 : 台北駅近くの夜店街